山の美しさを共有する
南アルプスの登山の歴史

何百年も昔から、地域の住民たちは森に入って木材を切り出すとともに肉と毛皮のために動物を狩ることを通して山の恵みに頼ってきました。南アルプス地域を訪れるとすぐに、この人間と自然環境が長年にわたって育んできた関係を感じとることができます。

しかし、南アルプスの山々は 19 世紀まで未踏のままでした。日本において、宗教的な行為として霊峰に登ることは千年以上前から行われてきたものの、娯楽としての登山という概念はヨーロッパ人によってもたらされました。

イギリス人のアーネスト・サトウ（1843-1929）は、1881 年に出版した著書『A Handbook for Travelers in Central and Northern Japan（日本中部および北部の旅行者のためのハンドブック）』の中で、次のように日本における娯楽としての登山の黎明期を叙述しました。「農鳥岳や白峰山の峰々に登ることは可能です。しかし、定まった登山道はなく、多くの場所には山道さえないため、観光客は険しく困難な登山に備える必要があり、ガイドの同伴が必要となります」

1886 年、芦安村村長の名取直衛は、北岳に神社を建立するとともに正式な登山道を整備する提案書を提出しました。2 年間の尽力の後、北岳は一般にむけて開山されました。登山の先駆者だったウォルター・ウェストン（1860-1940）が 1902 年に北岳登頂を果たすと、すぐに多数の国内外の登山家が後に続きました。地元住民は林業や狩猟の経験を活かして甲斐山岳会を設立し、北岳登頂を目指す登山家たちを支援しました。北岳を登った登山家たちは、2 つの木のスパイクがついた地元の雪靴などの従来の装備とヨーロッパ製のピッケルやアイゼンを組み合わせて使いました。

戦後、登山とハイキングの人気はますます高まりました。登山道までの道路が短縮され、登山道が整備されたため、登るのは容易になりましたが、今でも多くのガイドが活躍しています。これらのパイオニアたちは南アルプスの歴史、そしてどのようにして南アルプスが愛される登山スポットになったかにおける重要な一部です。